

対談

# 自然災害とたたかった 戦国武将に学ぶ 人材の育て方・使い方

高橋 裕 × 小和田哲男

高橋 裕 (たかはし・ゆたか)  
東京大学名誉教授

ユネスコ IHP 政府間理事会政府代表、世界水会議理事、国際連合大学上席学術顧問など歴任。『地球の水が危ない』『川と国土の危機 水害と社会』(岩波新書)など著書多数。「土木の絵本シリーズ」と教育映像「私たちの暮らしと土木」監修。

小和田哲男 (おわだ・てつお)  
静岡大学名誉教授

NHK「歴史秘話ヒストリア」やNHKEテレ「さかのぼり日本史」などの解説、NHK大河ドラマでは「秀吉」(1996)、「天地人」(2009)、「江～姫たちの戦国」(2011)の時代考証を担当。著書に『小和田哲男著作集』(清文堂出版)など多数。



高橋氏(右)と小和田氏の対談風景

## なぜ、戦国武将が 土木事業をおこなったのか！

**高橋** 武田信玄の映像をいま見ていただきましたが、信玄の特にすぐれたところは、主として釜無川の流れを、丁寧に観察したことだと思います。特に、洪水の後先で水はどう流れ土砂がどのように動くのかをじっくりと観察した。そこが治水工事の非常に重要な観点です。

そうした観察や調査から、水の力に逆らわず、水の力を利用するという自然哲学が備わっていたのでしよう。その代表的な土木工法が「信玄堤」に集約されて今に残っています。

戦国武将がなぜそうした土木工事をおこなったのか。それは、災害の多い日本の国土と深く関わっています。日本中、昔から洪水に悩まされてきたので、どの国でも、まず自分の領地を流れている川をおさめられなければ話が始められないわけです。自分の国をおさめなければ、外へ出ることも守ることもできない。釜無川だけじゃなく、日本はどこに行っても川が暴れますから、軍事と治水その他のインフラとは切っても切れない関係にあった。それを両方うまく行ったのが信玄であり、清正であり、秀吉であり、戦国から江戸時代にかけての名将は、だいたいみんな治水の大家ですよ。

**小和田** 戦国武将というのは、ただ合戦に強いというだけじゃないんですね。もちろん合戦に強くなるために国を豊かにする、国を豊かにするためには、水害被害をできるだけ減らす、そういう根本的なところがあった。

戦国武将たちは「富国強兵」、国を豊かにして、その豊かな国の力で戦いに臨む、勝っていくということ、高橋先生がおっしゃったように、軍事とインフラというのは本当に密接不可分な関係にあつて、特にその中でも、洪水被害をいかに最小限に防ぐかというところに、当時の武将たちは腐心をしていただいでしょうね。

よく戦国時代というのは「技術革新の時代」と言われます。特に築城術、鉱山開発の技術、治水術というか灌漑水利技術、この築城、鉱山、灌漑、三つの技術が、三位一体となって発達したのが戦国時代ですね。戦国大名の領国支配を安定的に行うためには、まず水をおさめることが決定的に大事だったと言えます。

## 戦国武将を支えた専門家グループとの 治水事業と地域開発の融合

**小和田** 普通どうしても「信玄堤」と言ってしまうと、何から何まで信玄が考えて、命令を出して、信玄一人でやったような印象を持ってしまふのですけれども、実は、いわゆるブレンたちとの相談の上なんです。テクノクラートという言い方をよくしますけれども、高

級技術官僚的な、そういう土木技術を身につけていた家臣団が、実は武田家臣団の中にいたのだということが非常に重要です。いわゆる評議、会議を開いて、いろいろ意見を言わせて、その中でいい意見を採用して実際の土木事業に使っているという、そのあたりが、やはり戦国時代の一つの状況でしょうね。

よく加藤清正のことを「治水の神様」あるいは「土木の神様」という言い方をしますが、もちろん清正自身もそういうノウハウは持っていたのでしょけれども、具体的なことをよく知

#### 【映像作品紹介】

### 『水とたたかった戦国の武将たち』

#### 『信玄堤』のおはなし

今から四六〇年ほど前、周りを山に囲まれた甲斐の国（現在の山梨県）では、度重なる大洪水にたえず悩まされていた。この時代、この国を治めていた甲斐の領主・武田信玄は、みずから多くの土木工事をおこなった。その治水哲学は、水に逆らうのではなく、自然の力を利用して川を鎮めるという考え方だった。この作品は、そうした自然哲学を象徴する「信玄堤」という土木工法を中心に描いている。



第20回土木学会映画・ビデオコンクール優秀賞受賞  
企画・製作 一般財団法人全国建設研修センター  
制作 虫プロダクション株式会社

っていたのは家臣たちだったのではないのでしょうか。そういった人のうまい使い方にも注目していく必要があるかなという気がします。

**高橋** たぶん当時は指導者の常識だったのでしようが、信玄は、治水事業と地域開発をきちんと融合させている。そして、治水事業によって移転せざるを得なかった人々をどう待遇するかを、治水技術と同時に考えていた。つまり、治水事業と地域計画がセットになっていた。川全体だけじゃなくて、流域の守るところもシステムとして考えた。元来、治水というのはそうあるべきものです。

土木の絵本『水とたたかった戦国の武将たち』では武田信玄と豊臣秀吉、いま話題に出た加藤清正を取りあげています。何もこの三人だけでなく、戦国時代から江戸時代、吉宗の時代まで、名治水家が大勢全国各地に出ていますね。とかくこういう人は独裁者だと思われるでしょうけれども、そういう治水行政とか、地域計画では、すぐれた部下のいろんな知恵をうまく集めて、さらには住民がどういうことを考えているかなど、身分や立場に関係なく聞く柔軟な耳を持つていたと言えるでしょう。

**小和田** 当時の武将たちは、家臣あるいは領民からそっぽを向かれたら成り立たないという思いは持っています。たとえば、毛利元就の子どもの毛利隆元、その家臣の志道広良という人が、自分の殿様である毛利隆元に向かって、「君は

船、臣は水」という言い方をして、「水よく船を浮かべ候も時に水よく船を覆す」なんていう言い方をしていますね。つまり、「殿様、殿様と威張っているけれども、おれたち家臣がいるからあんたは殿様でいられるんだ」というのが戦国的な主従関係なんです。

戦国時代、特に下剋上をさせないためには、家臣たちが十分納得して、安心させるといふか、安定させる。そのためには、領土を広げないと家臣たちが納得しない。これが江戸時代の武士道徳と決定的に違うところです。領民を安心させる、あるいは領民を守るのが上に立つ者の務めというのが、当時の武将たちの意識の中にあっただと思えます。

#### 歴史に学ぶ人づくり

### 戦国武将による部下の活用、育て方

**高橋** 今日のテーマは「歴史に学ぶ」ということで、そういう戦国から江戸時代の人たちの考え方の中に、今の日本というか、これからの日本の国づくりという意味で非常に参考にするところがあると思います。現在は、行政のシステムとか非常にがんじがらめに立派になって、とてもそれは戦国時代をそのまま応用できません。しかし、肝心なことは、国づくりに関する新しい政策を打つ場合でも、基本的には相手は自然ですし住民なのですが、遠い先、せめて一〇年、二〇年先にはどうなるかという見通しを

持つてやるのが大事だと思えます。

それから、もう一つのテーマである「人づくり」で、戦国の武將に学ぶべきことが多々あると思うのは、一つは、河川の現象の観察力ですね。洪水のときの流れ方、土砂の流れ方、それに対する観察力が非常にすぐれていたと思うのです。自然現象を丁寧に見る観察能力、それがあつてこそ立派な治水事業ができた。

やはり土木の仕事は自然が相手ですから、その自然現象を見る目を養うことが、この時代の名治水家から得られる教訓かなと思いますね。

**小和田** 加藤清正が、二人の治水にたけた家臣、森本義太夫と飯田覚兵衛を家老にまでしているというのは、部下の長所、適所を上の人が見ているからうまく活用できたと思うのです。

北条家の二代目、北条氏綱が三代目の氏康に遺言状を残しているのですが、その中でこんな言い方をしています。「人間に誰もくずはいないんだよ」と。戦国時代にはちょっと珍しい言い方なんですけど、その上で、「その者の役に立つところを召し遣い、役に立たざるところを遣わず候で、いずれをも用に立つ候をよき大将と申すなり」。要するに、戦国武將が部下たちを見ていて、その家臣が何に向いているのか、どういう部署に向いているのかを判断し、その役に立ちそうな能力を引き出す、それを探したのが上に立つ者の務めだよということを書いているわけで、これは、まさに人づくりにびつ

たりな言葉だなと私は思っています。おそらく

加藤清正は、森本義太夫と飯田覚兵衛が治水能力にたけていそうだなというのに気がついて、それでそういう仕事をさせたから、彼らはい仕事、いい働きをしたのではないのでしょうか。

**高橋** いまの人づくりは、とかく画一的人間を大量に育ててしまふようなシステムが一部ありますね。特に優秀な人を特別に引き上げる、あるいは適材適所というか、そういうシステムが、特に戦後の日本に無くならないまでも、弱くな

ったために、人づくりに少し支障を来しているのではないのでしょうか。みんながある程度の教養とものの考え方をある面までは持つべきだけれども、特にすぐれた人、あるいは適材をどういうふうにつ引張っていくかというのが、ある意味、これからの人づくりにとって一つの難問じゃないでしょうか。

**小和田** 確かにそうですね。たとえば土木水利に興味がある、あるいは堪能なこれからの若い人たちが育ってくる、そういうシステムというのもこれから必要かなと思えますね。

### 総合的な視野で学ぶ 歴史からの教訓

**高橋** これは一般論ですが、どうも工学系の学生は歴史に弱い傾向があります。歴史百般は無理ですけども、せめて自分が河川とか土木をやっていたら、それに関する歴史を知らない、



『川と国土の危機 水害と社会』  
高橋 裕 著  
岩波新書 新赤版1387  
735円(税込)

歴史の教訓も得られない。だから、何か専門とは違ふとか思わずに、自分の知識や技術を総合的に磨く上でも、歴史は非常に大事だということを理解してほしいと願っています。

**小和田** 歴史というのは、やはり過去を映し出し、そこに未来を照らすという形でのいわゆる鏡的な側面があります。今日お話しした信玄とか清正は成功例のほうですけども、やはり失敗例もたくさんあつたでしょう。よく「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」なんていって、経験に学ぶことをあまり評価しませんが、人類の過去の経験がイコール歴史になるわけですから、そこでやっぱり学ぶことができる。それを手がかりに次に進んでいくことが、人間の生き方としては大事なかなと思っています。

**高橋** 信玄は、ただ信玄堤をつくったというのでは、あまり歴史の勉強にはならない。どうしてああいうことを考えたのか、万力林は何の目的でつくったのか。そうした観点から勉強するのが、少なくとも河川や水に関する歴史的考察であると思えます。

(文責・編集部)